

# 中国人留学生の日本語習得成果における不安

藤 小春

## 要旨

本研究では、中国人留学生を対象に、自身の日本語習得状況に対する不安に関する調査を行った。中国人留学生は、来日後間もない時期に、自分の日本語習得の状況に対して具体的にどの程度不安を持つのか、彼らの実際の日本語習得状況はどのレベルなのか、彼らはその不安をどのように捉えるのか、その不安をどう解消するのかについて考察した。その結果、多くの留学生は、自身の日本語習得状況に対して不安を持っているものの、彼らのほとんどは、コミュニケーションが可能なレベルの日本語を習得していると考えていることもわかった。この結果を踏まえ、今後來日直後の留学生に対して、日本語習得の方法や心理面的アドバイスを与えることが、彼らの不安解消に有効であることを提案した。

キーワード： 中国人留学生、不安、日本語習得成果、日本語学習、留学生活

## 1. はじめに

第二言語の学習における不安に関する研究は、これまで多様な成果が積み重ねられてきた。Scovel (1978:134) は不安を、心配な状態における漠然とした恐怖であると定義した。不安は動機づけを弱め、態度を消極的にさせる原因であると思われる(たとえば、Scarcell & Oxford 1997: 77)。母国を離れている留学生について言えば、不安は日本語学習だけではなく、彼らの留学生活の心理健康とも極めて関わりが深いと言える。不安は、一時的な反応(場面的不安)と長時間的な反応(特性的不安)に分けられている。Horwitz (1990) によると、不安を抱いている大半の言語学習者は、一般的な性格特性を表に出さず、言語学習のある特定の場面で反応する。また、不安は場合により有益な面もある。たとえば、Scovel (1978)、Brown (1987) は好ましい不安は学習に有益な不安(促進性的不安)で、学習者の注意力と緊張感を持続させるのに役立つ。しかし、Horwitz (1990) は、促進性的不安は極めて単純な学習タスクに役立つだけで、言語学習のような複雑な学習には役立たないと考えている。

以上のことから、言語学習における不安においては、特性的不安は重視されていないように思われる。これまでの言語学習の不安に関する研究を見ると、やはり特性的不安に関する研究は少ない。しかし、特性的不安が存在すれば、学習者への影響は長期的なものになるため、言語学習のみならず、学習者の生活にまで深刻な影響を与

えかねない。よって、言語教育においては特性的不安を重視する必要がある。また言語学習において不安は促進的であるか、それとも阻害的であるかは、まだ憶測の段階（Scarcell & Oxford 1997: 77）であるため、言語学習に対する不安がどのような影響を与えるかについて、実証的な研究が行われなければならない。

外国人の日本語学習における不安の研究は少なくない。たとえば、元田（2000）は日本語の学習における不安尺度の作成について研究した。西谷・松田（2003）はベトナム人の日本語学習への不安について考察している。また西谷（2009）は、ベトナムと中国の日本語学習者の外国語学習に対する不安について、それぞれ多角的に調査している。その結果、中国人学習者の方が不安について促進的に捉えることがわかった。しかし、日本語を習得できるかどうかについての不安は、留学生にとって言語学習における最も根本的な不安であるものの、まだ詳しく検討されていない。特に、本稿で対象とする中国人留学生の日本語習得状況に対する不安については、これまで研究が極めて少ない。日本語習得状況に対する不安は特性的不安で、学習者に長期的影響を与えることから、その研究を行うことは、中国人留学生の日本語教育にとって極めて意義がある。多くの中国人留学生は国内で外国語（実践的なコミュニケーション力）を習得した経験がない。学習心理学の面からみると、成功した経験がない場合、学習者は外国語の習得に対する信念が揺らぎ、不安を持ちやすいと推測できる。学習者はその不安を促進的に捉えるのか、それとも阻害的に捉えるのか、また動機づけにプラスに働くのか、それともマイナス（否定的）に働くのかなど問題は、中国人留学生の日本語学習及び留学生活において、とても重要な研究テーマである。中国語は漢字を使用するため、中国人留学生は比較的日本語を学習しやすいと推測できる。それ故、中国人の日本語学習においてその不安の問題及びその解消法にも特有の特徴があると考えられる。たとえば、中国人留学生は日本語を学習しやすいと思われるが、どの程度学習しやすいのか。日本語が学習しやすいことで、中国人留学生は日本語の習得に対して自信を持ちうるのか、つまり不安を感じないのか。あるいは、漢字を使うとはいえ、日本語の習得に不安を持つものなのか。実際に日本語が中国人留学生にとって習得しやすいのであれば、その事実を、日本語を学習する初期段階の中国人留学生に教えれば、彼らの習得への不安を解消し、彼らに自信を与えることが可能であると推測できる。つまりこの自信は彼らの日本語学習に積極的、ポジティブな要素も提供できると予測できる。

また、日本語習得に対する不安は、当然留学生の留学生活にもかかわっている。留学生の心理的健康についての研究も少なくない（たとえば、水野・石隈 1998、佐々木・水野 2000、園田 2011）が、言語習得状況に対する不安の問題とその解決法に関する研究はまだ少ない。言語習得状況に対する不安が、留学生にマイナスの影響を与えるなら、彼らの留学生活にも何らかの好ましくない影響を与えるはずである。さらに、マイナスの影響がより拡大する可能性も想像できる。したがって、日本語習得状況に対する不安は、中国人留学生の留学生活における心理的な健康にもかかわっている。

本研究では以上の問題意識から、中国人留学生は日本語の習得に対して長期的な不安を持つのか、その不安は学習者にマイナスの影響を与えのるか、不安はどのように解消できるのかを課題として考察した。

## 2. 研究方法

本研究における調査方法は、以下の通りである。調査対象は在日期間が半年以内の中国人留学生 76 名（短期生と称する）と 1 年半以上 87 名（長期生と称する）、計 163 名（主に広島県内在住）である。全員来日前に日本語を専攻していない学生である。調査期間は 2008 年から 2012 年までである。在日期間が半年以内の留学生に対する質問の内容は以下である。

- (1) 日本語を習得できるかどうか不安を感じるか。
- (2) あなたから見て、自信あるいは不安を持つ心理はあなた自身にマイナス影響を与えているか。

在日期間が 1 年半以上の長期生に対する質問の内容は以下である。

- (1) 来日当初、日本語を習得できるかについて不安な気持ちはあったか。
- (2) あなたから見て、当時の自信あるいは不安を持つ心理はあなたにマイナス影響を与えていたか。
- (3) 現在あなたは当時達成し難いと思ったレベルの日本語を習得できたと思うか。
- (4) もし現在のレベルまで習得できることが分かっていたら、当時はそのような不安を持たず、より自信を持って、楽に日本語が勉強できたはずであると思うか。

(5) もし現在のレベルまで習得できることが分かっていたら、当時はそのような不安を持たず、より積極的に勉強できたはずであると思うか。

本研究の調査対象に来日半年以内と1年半以上の両グループを設定した理由は以下のとおりである。半年以内の中国人留学生は日本語の初期学習者といえる。この段階で日本語を習得する可能性は低いと考えられる。来日半年以内の留学生を調査すれば、日本語を習得していない段階で留学生の習得成果不安はどのように反映されているのかを考察できる。1年半以上日本で留学していれば、ほとんどの中国人留学生は日本人と一般的に日本語を用いて交流できると筆者は事前観察で分かった。したがって、来日1年半以上の留学生はコミュニケーションできるレベルの日本語を習得できた可能性が高い。1年半は留学生の日本語学習時間として決して短か過ぎる期間ではない。彼らの反省的思考を分析することによって、短期生が気づいていない不安の部分とその影響を検討することができる。

留学生、特に来日半年以内の留学生は日本語の習得成果、あるいは日本語を身に付ける自信があるかどうかの問題における一般的なインタビュー調査とアンケート調査に抵抗を感じる。これは中国で多くの留学生は同じような調査を受けた経験がないためであるかもしれない。したがって、本研究は、上記の質問項目による半構造的インタビュー形式を採用した。

### 3. 結果と分析

各質問の肯定と否定の回答数について統計を取った。また総回答における割合(%)を計算した。その結果は、表1のとおりである。

表1. 短期生と長期生の回答結果

問題	肯定	%	否定	%
(1) 日本語を習得できるかどうか不安を感じるか。	44	57.9	32	42.1
(2) あなたから見て、自信あるいは不安を持つ心理はあなた自身にマイナス影響を与えているか。	37	48.7	39	51.3

---

長期生	(1) 来日当初、日本語を習得できるかについて不安 な気持ちがあったか。	66	75.9	21	24.1
	(2) あなたから見て、当時の自信あるいは不安を持 つ心理はあなたにマイナス影響を与えていた か。	68	78.2	19	21.8
	(3) 現在あなたは当時達成し難いと思ったレベル の日本語を習得できたと思うか。	76	87.4	11	12.6
	(4) もし現在のレベルまで習得できることが分か っていれば、当時はそのような不安を持たず、 より自信を持って、楽に日本語が勉強できたは ずであると思うか。	60	89.6	7	10.4
	(5) もし現在のレベルまで習得できることが分か っていれば、当時はそのような不安を持たず、 より積極的に勉強できたはずであると思うか	55	82.1	12	17.9

---

表 1 に示すように、日本語が習得できるかどうか不安を持つ留学生はかなり多いといえる。短期生は 57.9%、長期生は 87.4% である。その不安が留学生にマイナス影響を与えているかどうかは教育心理研究のポイントになるため、各グループの質問 (1) と (2) の肯定回答において、正相関関係があるかどうかを検証した。相関検定により、質問 (1) と (2) に対する短期生の肯定回答の間には強い相関関係がある ( $r = 0.724$ ,  $F = 81.52$ ,  $p < .01$ )。長期生における質問 (1) と (2) の肯定回答の間にも強い相関関係がある ( $r = 0.677$ ,  $F = 71.94$ ,  $p < .01$ )。以上の相関検定結果は、来日時間が短かろうと (在日半年以内)、長かろうと、日本語の習得成果に対する不安を持つとその不安は自分にマイナス影響を与えると思う強い傾向があると示している。短期生において、その不安が自分にマイナス影響を与えていると思う理由は、その不安が日本語学習や生活に消極的心理反応を起こさせたためである。しかし、これは来日半年以内の留学生の反応だけで、時間が経ってから、彼らはこの不安を促進的に捉える可能性も否定できない。この問題に関しては、長期生の調査結果とその検定結果から疑問を解くことができる。来日 1 年半以上の長期生において来日当初不安を持っていた人は、

短期生と同じように当時の心理は自分にマイナス影響を与えたと思う傾向が強い。すなわち、長期的に見ても当初持っていた不安は阻害的に捉えられている。もう一つ注意すべきことは、長期生は短期生より質問（1）と（2）両方に対する肯定回答の割合が大きい（57.9%、48.7% 対 75.9%、78.2%）ことである。質問（1）と（2）に対する短期生と長期生の肯定回答の間に有意差があるかどうかについて  $\chi^2$  検定を行って確認した。その結果、質問（1）と（2）における両グループの肯定回答の間に有意差がある（(1) :  $\chi^2(1) = 5.177, p < .05$  ; (2) :  $\chi^2(1) = 14.118, p < .01$ ）。これは、長期生は時間が経って短期生よりその不安の存在、及びそのマイナス影響を理解できるためである。短期生は不安とそのマイナス影響を感じているが、まだ不安およびそのマイナス影響を意識していない場合もあると考えられる。したがって、留学生が来日後の初期段階に持つ不安が彼らの日本語学習と留学生活にマイナス影響を与えていることは事実である。以上から、本研究の問題において、多くの中国人留学生は来日当初日本語習得成果について不安を持ち、しかもこの不安は多くの留学生に影響を与えていることが明らかになった。

中国人留学生の日本語習得率はどうであるか。この問題を検討する前に、本研究の日本語習得について具体的に定義をする必要がある。ここでの習得はネティブのように言語を運用できるようになることではなく、学生が期待した日本語を用いて日本人と大きい支障なく交流できるレベルになることである。しかもこのレベルは人により判断の基準が異なるため、本研究では調査対象者の自己判断を基準とする。その理由は後文で説明する。中国人の留学生はほとんど中国国内で英語を勉強していた。しかし、現在までの中国の英語教育状況から見ると、大学卒業まで外国人と一定レベルの英語コミュニケーション能力を持つ卒業生は極めて少ない。受験英語は得意であるが、コミュニケーションは苦手という特徴は日本の状況と似ている。学生はコミュニケーション英語を勉強しているが、全体的な教育方向性に影響され、コミュニケーション能力が弱いと思われる。この問題は本研究でこれ以上議論しない。中国人留学生は中国で実際的な英語コミュニケーション力を身に付けておらず、彼らは自分がまだ外国語を習得した経験を持っていないと思っている。したがって、留学生はたとえ日本に来て、「私は本当に外国語を習得できるか」のような不安を持ちやすいと考えられる。本研究の調査結果から、ほとんど（87.4%）の留学生は自身が達成し難いと思ったレベルの日本語を習得できたと思うようになった。残りの 12.6%（11名）の留学

生は習得していないと述べていたが、3名は日本での勉強や研究は英語で行い、また将来の仕事に日本語が必要ではないため、最初から日本語を学習するつもりがなかったと説明した。ちなみにこの3名は来日の最初に日本語の習得に不安を持っていなかったと述べた。その他の8名は最初から日本語を習得できる自信がなかったため、日本語の学習をあきらめたと説明した。ゆえに、日本語を意欲的に学習した中国人留学生自身の判断では、彼らは全員日本語を身に付けたと考えられる。一方、日本語の学習をあきらめた留学生はその不安による結果であると考えられる。日本語が中国人留学生にとって学習しやすいと思えば、あきらめた留学生のみならず、日本語を学習するつもりがない留学生でも日本語を学習しようとする可能性もある。では、意欲を持って日本語を学習すれば習得しやすい事実を、不安を持ちやすい留学生に伝えればその不安を解消できるのか。さらに確認してみた。

留学生は意識的に日本語を学習すれば習得できない人がほとんどいないことが分かれば、彼らの日本語学習により影響を与えられるのか。これは長期生の質問(4)と(5)に対する回答から分かる。質問(4)は留学生が習得できることが分かっていたらより自信を持って気楽に日本語を学習できるかについて学習者の反応を調査した。質問(5)は学習者が日本語を意欲的に学習すれば習得できることが分かっていたら学習に積極的になるのかを調査した。また、(4)と(5)の回答の間に相関性があるかどうか確認すれば、中国人留学生が自信を持てば積極的に学習することになるのかが分かる。調査の結果、長期生は(4)と(5)に対してほとんど(それぞれ89.6%、82.1%)肯定の回答をした。ということは、ほとんどの留学生は習得できることが分かれば、自信を持って日本語を楽に学習できると考えている、また多くの留学生は習得できることが分かっていたらより積極的に日本語を学習できるとも考えている。したがって、留学生は意欲を持って日本語を学習すれば習得できることが分かっていたら、より自信を持って気楽に学習し、積極的に学習する傾向があると考えられることから。(4)と(5)の回答について相関検定を行ったところ、相関関係があることを確認できた( $r = 0.604$ ,  $F = 37.33$ ,  $p < .01$ )。つまり、自信を持って気楽に日本語を学習することと、積極的に勉強することには相関関係があると言える。

したがって、意欲を持って学習すれば、ほとんどの人は習得できることについては、最初に中国人留学生に知らせるべきである。習得への不安は過剰反応にすぎず、実際には不安にとらわれなくてもよいことが分かれば、彼らは自信を持って気楽に学習で

きるだけではなく、動機づけもよくて積極的に日本語を学習することになると考えられる。そこで本研究は具体的指導方法として以下のように提案する。

#### 4. 具体的解決案

学校は留学生の習得状況について統計を取るべきである。統計は学校の筆記試験の成績のみならず、留学生のコミュニケーション力についても取る必要がある。コミュニケーション力は教員との短時間の談話ではない。教員との短時間の談話(たとえば、授業中の練習や会話テストなど)は学生が緊張しているところで行われる可能性が高く、自然会話とかなり異なる。実際に観察すれば、授業中会話がうまくできない留学生でも生活中的コミュニケーションがよくできるケースがとても多いからである。不安の原因は自己意識において日本語レベルが習得できないという不安があるためである。したがって、習得したかどうかは学校や教員の基準ではなく、留学生自身が設定した日本語能力で判断して統計する必要がある。留学生自身が決めた基準に達することができないと彼らの自信が傷つき、日本語習得成果についての不安が起きるのである。逆に、その基準に達すれば自信が生まれ、学習の動機づけも強くなると考えられる。学校の成績が良くなくても留学生の学習成果を否定せず、生活上日本語をうまく運用できれば高く評価しなければならない。多くの留学生にとって、日本語学習の本来の目的は試験でよい点数をとるためではなく、日本語を運用するためである。生活中的運用能力を評価すれば、学習者の学習方針も正確に導ける。本研究のような方法で習得率を統計的に検討すれば、中国人留学生の習得率はかなり高くなる傾向がある。このような習得率のデータを学習者に見せれば、彼らに日本語習得成果における不安は過剰反応であることを認識させられる。本研究の調査対象(長期生)のうち、自身の学習能力(たとえば、理解力、記憶力)に対して自信がない人は少なくないが、調査の結果、彼らはこの理由で習得できないケースがない。このような実例は不安を持つ留学生にとって必要なストレス解消剤になると考えられる。また、Rubin (1981)、Bailey (1983)、Oxford (1990)などが提案したように、学習者の不安についてよく知っている教師は学習者と定期的に交流し、学習者にアドバイスを与え、精神的な支援などをする必要がある。Horwits (1990)などは、授業以外で言語学習を援助するグループがあれば、言語学習者の不安解消に貢献できると提案した。以上の先行研究や、本研究の調査結果から、留学生教育部門は、留学生に日本語を教える以外に、日本語



を学習する際の不安を解消することに力を入れる必要があると考えられる。

## 5. 終わりに

外国語学習において場面的不安が重視されているが、特性的不安は問題としてそれほど扱われていない。しかし、特性的不安は外国語学習者に長期的な影響を与える可能性もあり、重視しなければならない場合もある。本研究は特性的不安—日本語習得における不安は来日初期の中国人留学生に大きいマイナス影響を与えているかどうかについて考察した。その結果、多くの中国人留学生は来日の早期に日本語を習得できるかについて不安を持つ。その不安に対し、ほとんどの中国人留学生はマイナスの影響を感じている（否定的に捉える）。来日 1 年半以上の留学生に対する調査結果によると、意欲があれば、ほとんどの留学生は日本語を習得することも分かった。したがって、日本語習得における不安は過剰反応な不安で、学習能率や留学生活にもマイナスの影響を与えると考えられる。日本語を習得していなかった留学生は、ほとんど日本語を習得できる自信がないこと（日本語習得成果についての不安）により、学習をあきらめていたためである。そして、日本語習得成果への不安を否定的に捉えた中国人留学生は、自信を持って気楽に学習できないだけでなく、積極的に学習できないことが分かった。ゆえに、日本語習得成果における不安の軽減は、中国人留学生の日本語学習に極めて重要である。言語クラスでの不安の軽減方法について、Oxford (1990)、Horwitz (1990) などは、教師は否定的な自己暗示ではなく、肯定的な自己暗示をすることにより、学習者が真面目に勉強すれば上手に話せることを学習者に認識させる方略、学習者をリラックスさせ、幸福感を与える臨床心理学的方略、学習者に不安を知ってもらう機会と教師に学習者を支援する機会を与える方略を提案した。

「Oxford と Horwitz の提案はクラスでの言語不安への対処提案ではないが、中国人留学生の日本語習得成果への不安は、教師や専門家などから、ほとんどの中国人留学生が日本語を習得できることを早期に知らせれば有効であると考えられる。現在大学の留学生教育は学校の一般的な日本語授業を重視しているが、日本語教育とかかわる学生の心理面を十分に考慮しているわけではない。留学生の学習心理について支援する専門家がいる大学は少ない。日本語を教えるのは大事であるが、心理的に健康な状態で日本語を学習できるような環境を作ることも重要である。不安だけでなく、様々な学習方略についても授業以外の機会に、留学生にアドバイスを提供できる教員また

はグループが必要である。

#### 【参考文献】

- Bailey, K.N. (1983). Competitiveness and anxiety in adult second language learning: Looking at and through the diary studies. In H.W. Seliger & M.H. Long (Eds.), *Classroom-oriented research in second language acquisition* (pp.67-103). Rowley, MA: Newbury House.
- Brown, H.D. (1987). *Principles of language learning and teaching* (2<sup>nd</sup> ed.) Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Horwitz, E. (1990). Attending to the affective domain in foreign language learning In S.S. Magnan (Ed.). *Shifting the instructional focus to the learner* (pp. 15-33). Middlebury, VT: Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages.
- Oxford, R. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House/Harper & Row.
- Rubin, J. (1981). Study of Cognitive processes in second language learning. *Applied Linguistics*, 11, 118-31.
- Scovel, T. (1978). The effect on foreign language learning: A review of anxiety research. *Language Learning*, 28(1), 129-42.
- 水野・石隈利紀 1998. アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究. 『カウンセリング研究』31, 34-48.
- 元田静 2000. 日本語不安尺度の作成とその検討: 目標言語使用環境における第二言語不安の測定. 『教育心理学研究』第 48 卷, 第 4 号, 34-44.
- 西谷まり・松田稔樹 2003. ベトナム人日本語学習者の外国語不安. 『一橋大学留学生センター紀要』第 6 号, 77-89.
- 西谷まり 2009. 動機づけ・外国語不安の捉え方と学習方略: ベトナムと中国の学習者の比較. 『一橋大学留学生センター紀要』第 12 号, 15-25.
- 佐々木・水野治久 2000. 外国人研修生の異文化適応に関する縦断分析. 『日本国際センター紀要』10, 1-13.
- 園田智子 2011. 短期交換留学生の異文化適応に関する調査報告: 主観的適応感と関連要因を探る. 『留学生交流・指導研究』Vol. 14, 75-85.
- Scarcell, R., and Oxford, R. (1997). 『第二言語習得の理論と実践: タペストリー・アプローチ』(日本語訳: 牧野高吉ほか). 東京: 松柏社.